
心の道

杉村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の道

【Zコード】

N1574D

【作者名】

杉村

【あらすじ】

私の気持ち行動人の顔を見て生きてきて、我慢出来なくなつた自分がとつた行動により、自分が次第に落ちて行く…

私

同じ人間

同じたつた一つの命を持つて生きている。

なのに同じ生き物を馬鹿にする、傷付ける。

綺麗ごと並べて良い顔見せて、思つてもない慰めの言葉なんかかけたりして。本当、人間つて器用な生き物だとつくづく思う。今の私だからこんな事ばつか考えられるようになつたんだと思う。まだ18年しか生きてないけど私の見て来た事、経験してきた事話そつとう思つ。自慢出来る経験はしていないけど、くだらないとか思うかもしないけど何かしら感想持つてくれたら嬉しい。

私は幼稚園の時から人の顔色、表情をみて生きて來た。だからたくさん色んな気持ち我慢して來た。私が良い子にしていれば皆笑顔で居てくれるし、私さえ我慢していれば皆平和に暮らして行ける。いつも笑顔でいて何事でも泣き言言わなければ親も喜んでいてくれるだろう。

「お母さん、今日も一人で寂しくない？」

小学校へ登校する前に必ず交わした言葉。

父はいつも仕事、お姉さんの所。特に何も無いのにいつもお姉さんの所へいき、母を一人にしておく。だから私しか母の悩みを聞いてあげる人も居ないし、私にしかハツ当たり出来ない。だから私は良い子でいる。私さえ我慢してれば母もそのうち笑ってくれるだろう。

私が父をよく見たのは小学校三年生。学校から帰つたら父は寝ていた。嬉しいと言うか複雑だった。今までいなかつたくせに堂々と寝ている。今、目の前にいる。なぜか怒りしかなかった。

居るようになり夫婦喧嘩が始まり私が止めに入り一生懸命機嫌取

りし、正直

「親なんかいらない」って思つてた。家に居たくないし、出て行きたいけど小学生の私には何も出来なかつた。だから表情みて生きて行かなきや行けない。家に居てもどこにいても結局独りぼっち。私さえ我慢していれば苛立ちもそのうちおさまつてくれるだろ。私は中学生になつた。

この年から私の我慢が限界になつて來た。幼稚園から行つてた塾もやめ習字もやめた。でもまだ我慢して生きていた。生徒会もやり賞状たくさんもらつて、イベントで活躍して、親の思い通りに行動してた。私が良い子にして居れば親の評価も上がるし、私さえ我慢していればそれで満足してくれるだろ。う。

中学生三年生、二学期私は遊び半分で受けたタレントオーディションに受かつた。親は喜び周りに自慢し親の育て方がよかつたんだと言いふらしていた。これも結局親のためになる。

原宿に写真を取りに行き、着物を買ひ、学校も休み、母はどこまでもついて来てくれた。

三学期になり進路を決める二者面談で私は芸能へ進みたい気持ちを伝え、簡単に終わつた。みんなどここの制服が可愛いだの、先輩と同じところ行きたいだの、楽しそうに会話していた。私は仲間に入れない。進路決まつてる人は関係ないと言わんばかりに、グループを作つて話している。授業も試験に合わせた勉強になるし、話も高校の話ばっかり。

私のわがままだけど口には出せないけど寂しかつた。家に居ても学校にいても寂しかつた。でも私さえ我慢すれば何事もうまくいく、平和に生活できる。

卒業式の練習が始まつた。この時期に私の我慢は爆発した。家出をした。毎日の親との会話もいや、親の機嫌もとりたくない。言いたい事言いたい。ぶつかりあいたい。

そう思つても私に出来ない。学校行つても仲間に入れないと寂しくて逃げた。

家に帰り、荷物をまとめかばんと洋服を何枚か持ち出かけて来るといい、家を飛び出した。

最初は不安だし、お金も無いし、どこにいけばいいかわからないしでも親の元から離れられたこの、解放感、反発した自分にすごく嬉しくなった。駅を彷徨い電車に乗り大宮へ行つた。次に池袋へ行つた。西口に降りて駅に座つて居た。たくさん人が居て不安はなかつた。何をしているわけでは無いけれど楽しかつた。

何時間か座つていて声をかけられた。

「誰か待つてるの？」

私は黙つて首を横に振つた。そうしたら相手のおじさんは笑顔で言った。

「1万円でいい？」

わけがわからなかつた。くれるのか、私が家出をした子なんだと分かつて同情してくれたのか？私は黙つてた。おじさんは笑顔で何か合図している。

私は立ち上がるとおじさんの後についていった。説明も大ざつぱにされたからこれからどうなるかどうするか分かつて私はついていつた。でも恐怖は無かつた。辛くもなかつた。親のところに居る事より辛い事はないと思つてたし、自由に行動できる。私は一人でいきていけると強く自信があつたからだ。

ホテルについた。中に入りベットに倒されパンツも下ろされた。全裸にされて舐めまわされ、セックスもした。一時間くらいたつてようやく終わつた。最後にイスの上に一万円をおき、「僕、先にでるからね」と言われ部屋を出て行つた。

乱れたベット、ゴミ、自分の体を見て、たくさん涙が流れて來た。言葉も出ない。怖いわけでもない。ただ涙が溢れてとまらなかつた。

ホテルを出た後、彷徨い歩いた。何人かに声をかけられたが無視をした。中にはしつこい人も居た。その日は漫画喫茶に入り夜を越そくとおもつた。

漫画喫茶に入り、高収入のサイトを見た。全部18歳からの応募で、15歳なんて相手にしていなかつた。でも色んな所へ電話した。身分証の事を必ず聞かれるのは少しうんざりしたが無いとなんとか理由をつけ、話をつけた。そして千葉のヘルスのお店に面接に行く事になつた。

千葉駅には初めてきたせいか仕事が決まってはいなければ決まるかもしれない緊張感からかすごく嬉しくなつた。

駅で待つて居ると黒い車が目の前に止まつた。名前も聞かれ承知するどそこのお店に連れて行つてくれた。

店の中には女の子の写真がたくさん貼つてある。トランク系の音楽が耳鳴りするくらいの音で流れている。個室に案内されソファーに座つていると、背の小さい細い男の人来た。自己紹介をされ店長だと知つた。

面接が始まり、色々な事を聞かれ歳の事ももちろん聞かれた。
ダメかな…

と少し不安になつていたがあつらかんと、

「19歳で通してね。」

と一言だつた。あまりにも簡単すぎてにやけてしまつた。

仕事内容、やり方、話し方、色々説明された。何がなんだか正直分からなかつたけど、笑顔で返事した。

その日、風俗デビューをした。名前はレオナ。店長につけてもらつた源氏名。写真も撮つてもらい店の受け付けには貼られている。

「19歳の新人レオナちゃん！この業界は未経験デビュー！…若さ溢

れる柔らかい肌に癒されちゃってください...」
と大きく説明書きもされてある。

初めての風俗。

きっかけはお金がほしいのと住む所が欲しかったから。
普通は抵抗あるだろ?...って思うかもしないけど池袋でセックス
いわゆる援交してお金をもらつた。体でお金をもらつ事に本当に馬
鹿なくらい抵抗が無かつた。セックスして、短い時間人と居るだけ
だし、我慢する事は慣れているし、私の天職とまで思つた。我慢
してセックスして笑顔振りまいてればお金もらえるんだもの。

初めてのお客様。

近くのラブホテルで待ち合わせ。

携帯、ローション、コンドーム、グリーンス、イソジンがはいつてい
る鞄を持ちホテルへ向かつた。

ホテルの前には中年くらいのおじさん（お客様）が立つていた。私
と顔を見合わすと目で会図をし、言葉を交わす事無く、ホテルへ入
つた。

おじさん（お客様）はベットに座りタバコを吹かし始めた。私はど
うしたらいいのかあたふたしていた。そんな姿を見ていたおじさん
（お客様）は

「新人なんだつて?よくこの店利用してるけど十代の子初めてでさ
あ、おじさんも緊張しちゃうよ。とりあえず隣りおいで」
と言われ隣に腰掛けた。腰に腕を回され、唇を合わせてきて舌を絡
めてきた。そのまま洋服の上から胸をもまれ、そこにも手がのび
いじり始めた。私の手を大きくなつたあそこに持つて行き掴ませた。

だんだん激しくなり、マニユアル通りに進めようと口をはさんだ、
「シャワー行きませんか?」

聞いていない。無理やりといつていい程に強引に洋服を脱がし、私の体に乗ってきた。重くて痛くてでも抵抗も出来ない。口に大きくなった物を押し込んで来て腰を動かす。そして私のあそこへいれ、射精した。気持ち良くも何とも無い。何も感じない。

マニユアルと全然違う。こんな無理やりな物なんだと思った。本當ただの性欲処理だなって思った。

初めての仕事も終り私の風俗デビューは最悪な物で始まった。でも辛くない。これから私は風俗で生きて行くんだと強く新たに決めた。

お店で寝泊まりをし何人かの女の子と友達になりご飯を食べに行ったり買い物に行つたりした。ある日飲みに誘われ初めてホストクラブへ行つた。たくさんの若い男の人がスースを着て迎えてくれた。店も賑やかだつた。少し緊張したけれどなれなれしく話しかけて来て自然に緊張もなくなつた。楽しくなつてきて、お酒も飲み、歌も歌い、盛り上がつた。

帰り道友達とフラフラになりながら帰つた。すごく楽しかつた。初めて私の気持ちを聞いてくれる相手が出来た。優しく、言葉も、私も包んでくれる。嬉しかつた。すごくすごく楽しかつた。

この日がきっかけで私はホストクラブへハマつてしまつた。何回か友達と行くと、一人でも行くよくなつた。気に入ったホストを指名してずっと隣にいて欲しくて高いお酒も頼んだ。

ノリというホストに私は惚れ込んでしまつた。お金も体も心も全てノリの物になつた。

私の地獄の始まりだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1574d/>

心の道

2010年12月5日10時26分発行